

平成19年度少人数指導に関する調査の概要

調査の概要

1 調査のねらい

少人数指導加配校における指導の状況及び効果と課題を明らかにする。

2 調査の対象

(1) 対象校

平成19年度に少人数指導加配した小・中学校から小学校30校，中学校30校を抽出し（各教育事務所から小・中各3校）その校長を対象に調査を行うものであること

3校の抽出方法は，大規模校（3人以上配置校）1校，中規模（2人配置校）1校，小規模校（1人配置校）1校の計3校を原則とする。

(2) 対象者

校長

3 調査の時期

調査は，平成19年8月中旬から下旬までとする

4 調査の内容

少人数指導の学習指導上及び生活指導上の効果・課題等並びに今後の在り方について調査する。

5 調査結果

(1) 調査結果は，項目毎に集計して活用する。なお，結果は県教育委員会教職員課に送付することとする。

(2) 調査結果は，総合教育センターから当該教育事務所及び市町村教育委員会並びに当該校に報告するものとする。

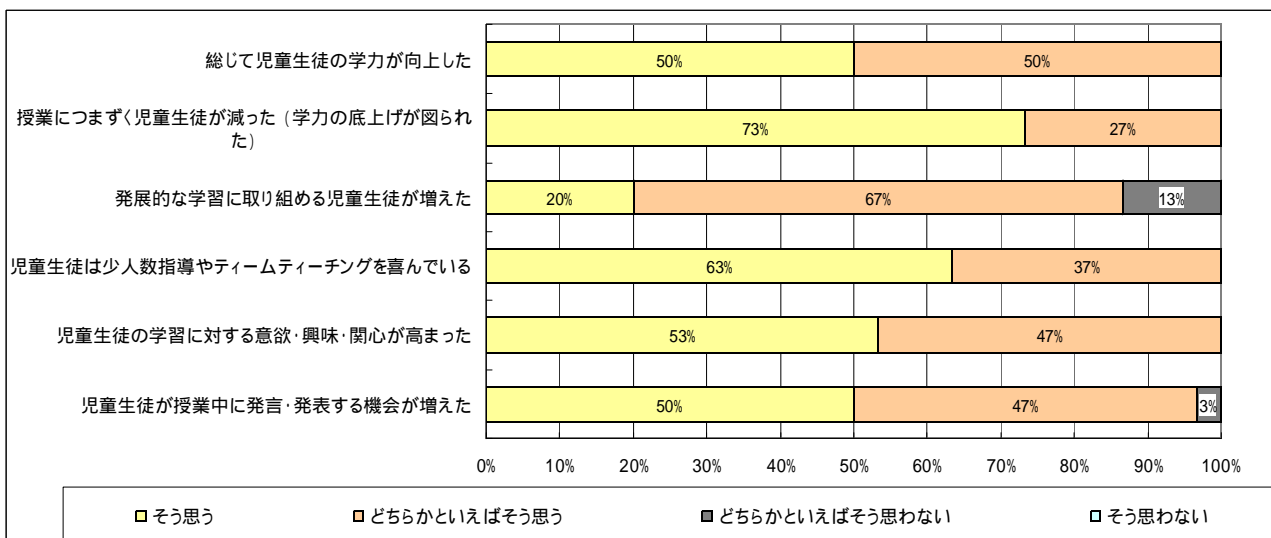
調査結果

1 学習面の効果

学習面の具体的な効果を示したのが，次の[グラフ1]と次頁の[グラフ2]である。

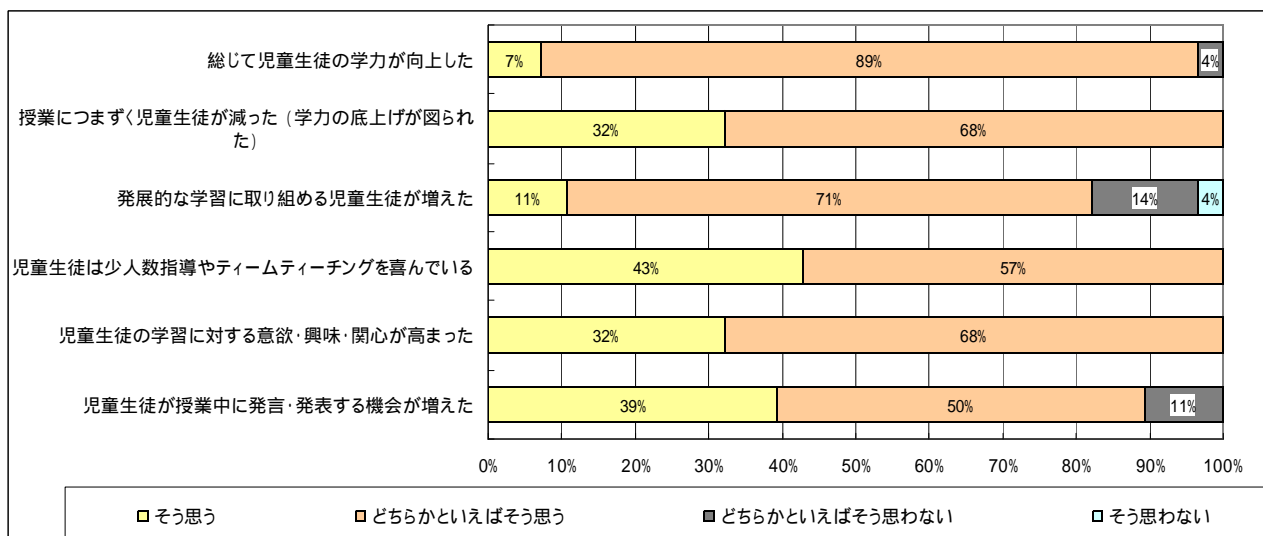
[グラフ1] 学習面の効果（小学校）

N = 30人



【グラフ2】 学習面の効果（中学校）

N = 30人



前の頁の[グラフ1]と上の[グラフ2]のとおり、「総じて児童生徒の学力が向上した」と回答した割合は、小学校で100%（そう思う50%，どちらかといえばそう思う50%），中学校96%（そう思う7%，どちらかといえばそう思う89%）である。

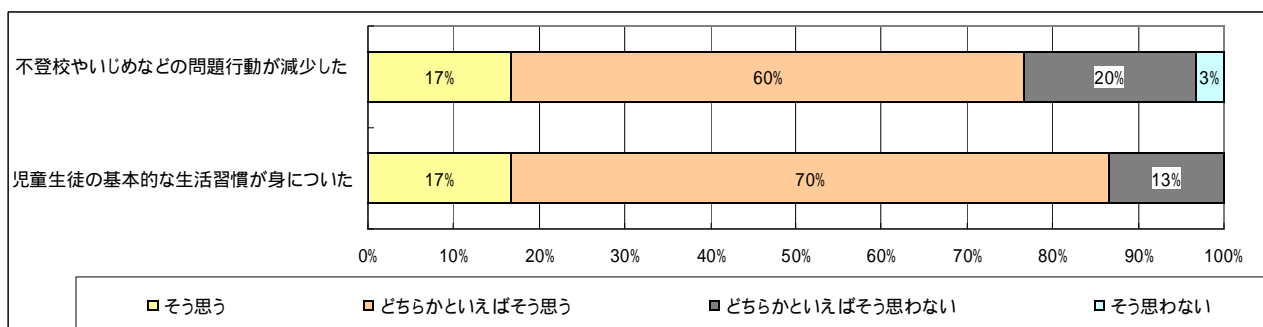
具体的な効果についてみると、小・中学校とも「授業につまずく児童生徒が減った」と「児童生徒は少人数指導やチームティーチングを喜んでいる」の項目において効果があると回答している割合が、100%であることをはじめ、「児童生徒の学習に対する意欲・興味・関心が高まった」等、多くの項目においてその割合が90%を超えている。

(2) 生活面の効果

生活面の具体的な効果を示したのが、次の[グラフ3][グラフ4]である。

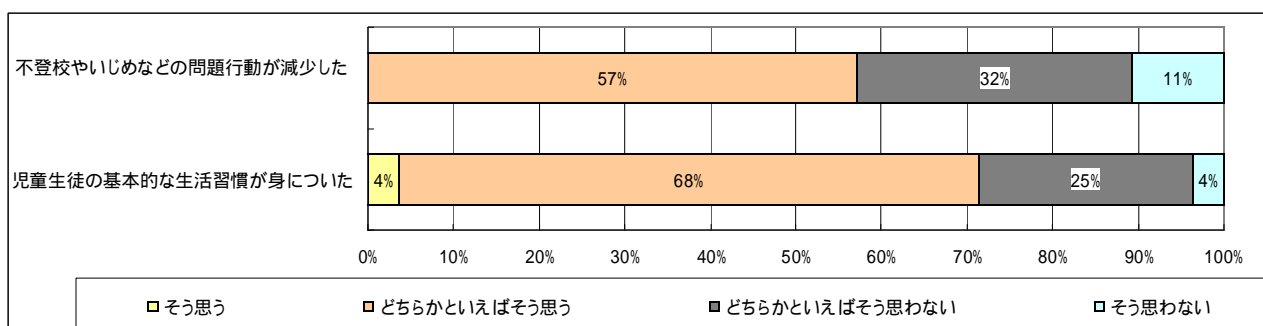
【グラフ3】 生活面の効果（小学校）

N = 30人



【グラフ4】 生活面の効果（中学校）

N = 30人



上の[グラフ3][グラフ4]のとおり、「不登校やいじめなどの問題行動が減少した」と回答した校長の割合は、小学校で77%（そう思う17%，どちらかといえばそう思う

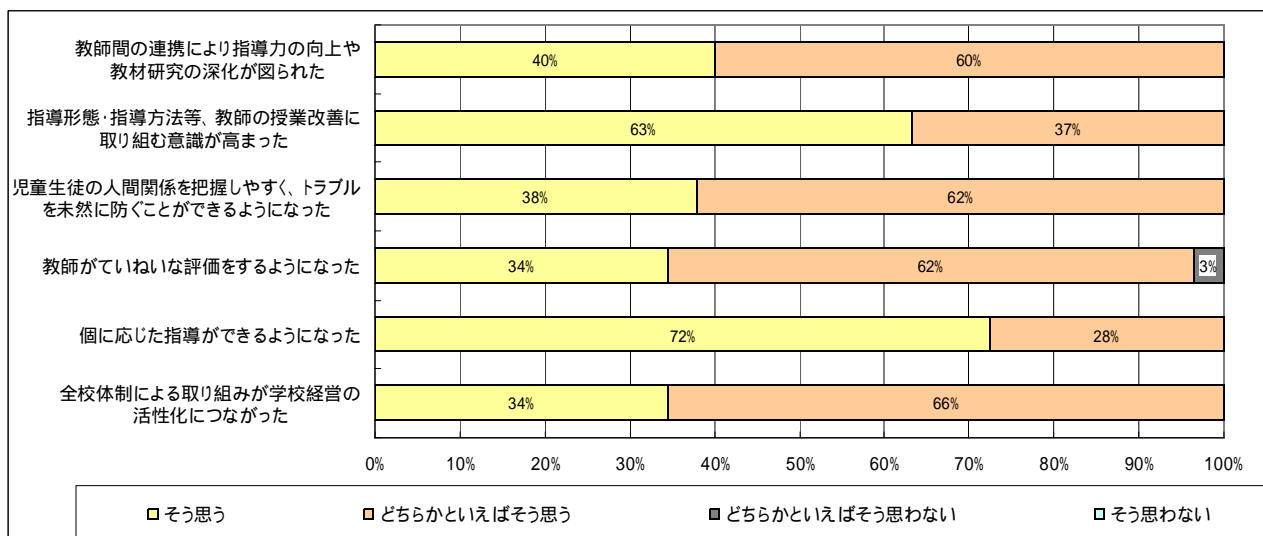
60%)、中学校で57%（どちらかといえばそう思う57%）。「児童生徒の基本的な生活習慣が身についた」と回答した校長の割合は、小学校で87%（そう思う17%、どちらかといえばそう思う70%）、中学校で、72%（そう思う4%、どちらかといえばそう思う68%）である。

(3) 指導上の効果

指導上の具体的な効果を示したのが、次の[グラフ5][グラフ6]である。

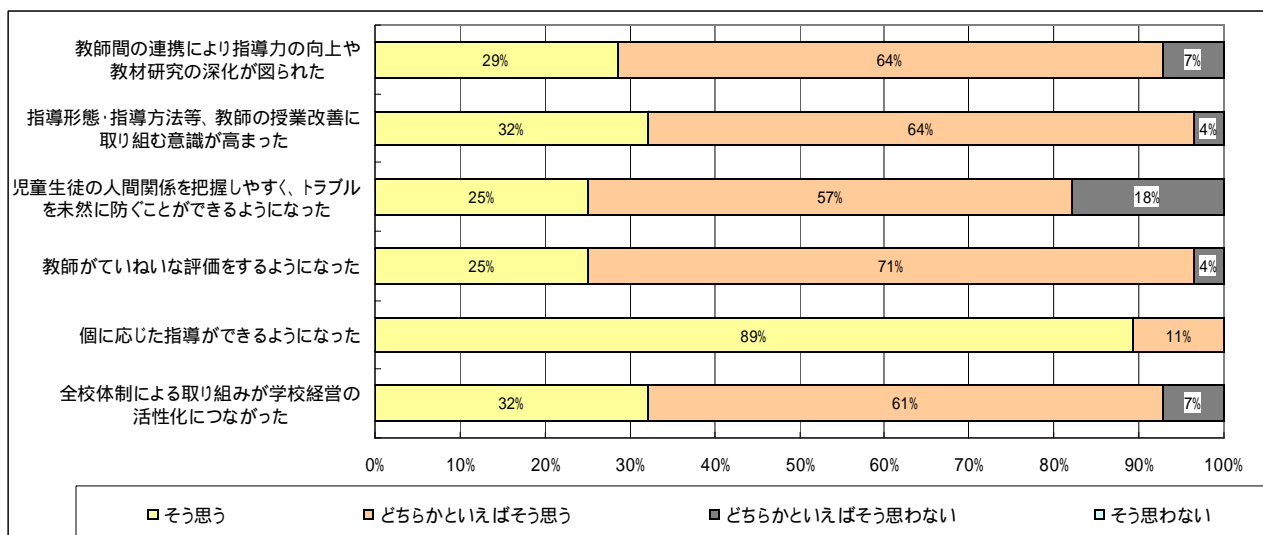
[グラフ5] 指導上の効果（小学校）

N = 30人



[グラフ6] 指導上の効果（中学校）

N = 30人



上の[グラフ5][グラフ6]のとおり、小学校では6項目中5項目で効果があると（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」）回答した割合が100%であり、残り1項目も96%である。

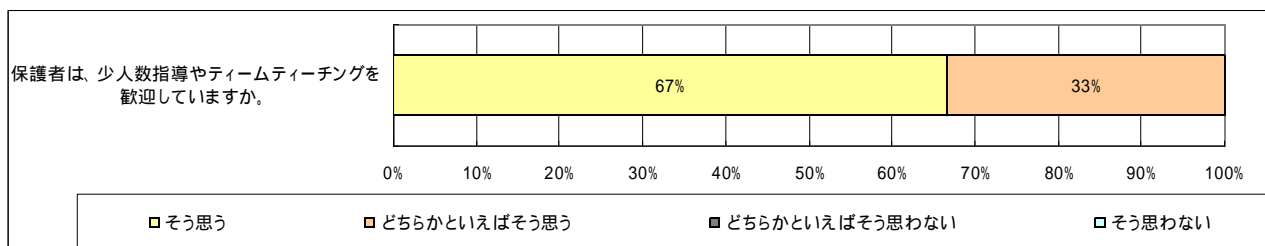
中学校でも、「個に応じた指導ができるようになった」で効果があると回答している割合が100%である他、5項目中4項目で効果があると回答した割合が90%を超えている。

(4)保護者の反応

保護者の反応について示したのが、次の [グラフ 7] [グラフ 8] である。

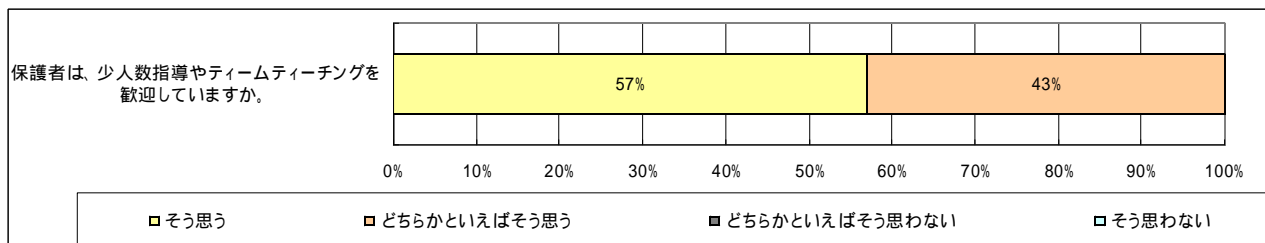
[グラフ 7] 保護者の反応 (小学校)

N = 30 人



[グラフ 8] 保護者の反応 (中学校)

N = 30 人



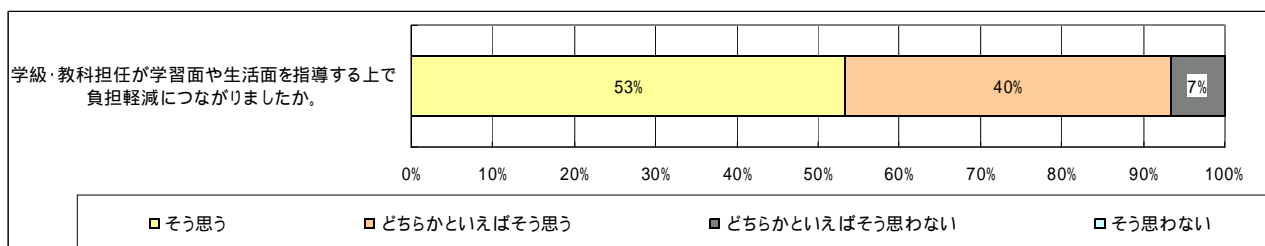
上の [グラフ 7] [グラフ 8] のとおり、「保護者が歓迎している」と回答（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」）した校長の割合は、小・中学校とも 100% である。

(5) 指導上の負担軽減

指導上の負担軽減について示したのが、次の [グラフ 9] [グラフ 10] である。

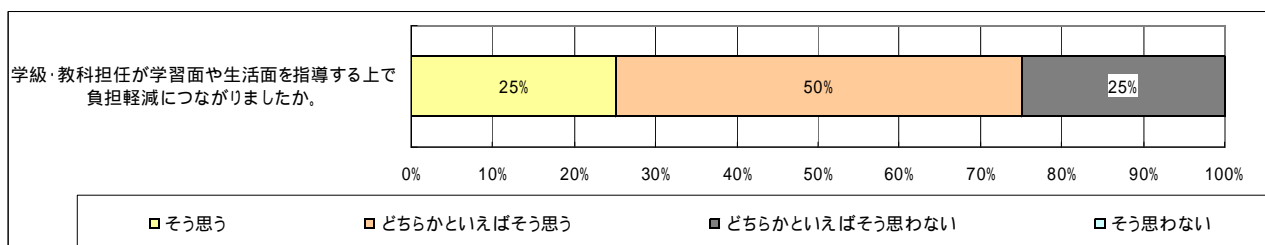
[グラフ 9] 負担軽減 (小学校)

N = 30 人



[グラフ 10] 負担軽減 (中学校)

N = 30 人



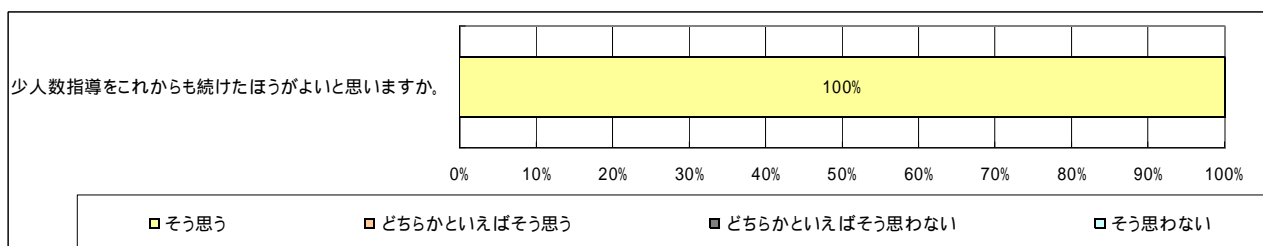
上の [グラフ 9] [グラフ 10] のとおり、「学級・教科担任が学習面や生活面を指導する上で負担軽減につながっている」と回答した割合は、小学校で 93%（そう思う 53%，どちらかといえばそう思う 40%），中学校で 75%（そう思う 25%，どちらかといえばそう思う 50%）である。

(6) 今後の方向性

今後の方向性について示したのが、次の [グラフ 1 1] [グラフ 1 2] である。

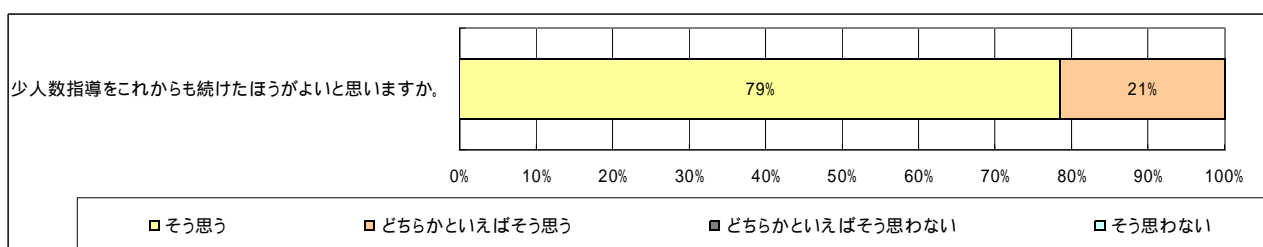
[グラフ 1 1] 今後の方向性 (小学校)

N = 3 0 人



[グラフ 1 2] 今後の方向性 (中学校)

N = 3 0 人



上の [グラフ 1 1] [グラフ 1 2] のとおり、「少人数指導を今後も続けたほうがよいと思いますか」という質問に「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は、小中学校とも 1 0 0 % である。

(7) 今後の取組に関する意見

括弧内の数値は回答した学校の数を示すものであること

小学校

- ・ 打ち合わせの時間の確保と効率化を図ること (1 1)
- ・ 少人数指導加配を継続すること (1)
- ・ 効果的な指導形態の在り方を工夫すること (3)
- ・ 教室を確保すること (3)
- ・ 国語 / 算数以外での少人数指導の可能性をさぐること (1)
- ・ より効果的な習熟度別グループ編成の在り方を工夫すること (2)
- ・ 親の理解をさらに広げていくこと (1)
- ・ オープンスペースの教室が必要であること (1)
- ・ 少人数指導教員の研修会の実施 (2)
- ・ グループ編成の際の担任と児童の希望のずれ (1)
- ・ 担任外の負担増 (1)
- ・ 集団による指導と少人数による指導のよさの双方を生かす工夫 (1)
- ・ 上位の子ども の 学力をあげる手立てを工夫すること (3)
- ・ 単元指導計画を改善すること (1)
- ・ 休み時間を活用して指導すること (1)

中学校

- ・ 効果的な指導法を開発すること (2)
- ・ 20 時間以上というしばりの弾力化を図ること (1)
- ・ 教室を確保すること (1)
- ・ 担当教師間の打ち合わせ時間を確保すること (5)

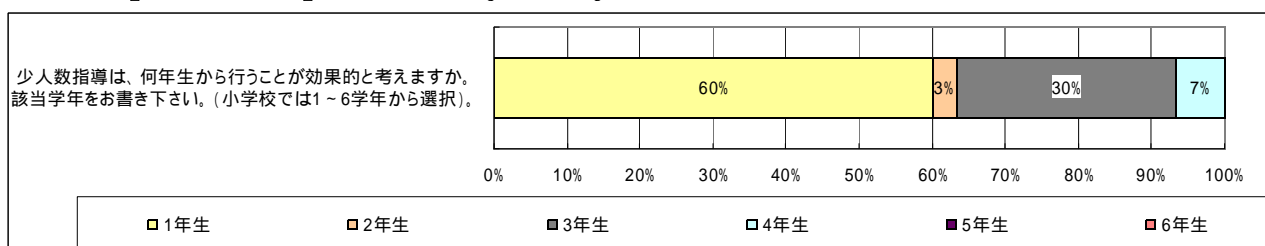
- ・ 進度の調整をすること（２）
- ・ 発展的な指導を充実させること（１）
- ・ 特別な支援を必要とする生徒への対応を工夫すること（１）
- ・ 教員増できめ細かな指導の充実を図ること（３）
- ・ 進路の関係で２，３年生で少人数指導をしているが，中１でも実施すること（１）
- ・ 教職員全体の意識を向上させること（２）
- ・ 担当教員の免許の問題（１）
- ・ 習熟度別指導を行ううえでの教師と保護者の理解を図ること（２）
- ・ クラス分けを工夫すること（２）
- ・ 教師の力量と生徒の人数のバランスをとること（１）
- ・ 時間割編成（２名をそろえること，出張の場合自習になりがち）を工夫すること（２）
- ・ 評価規準を具体的に設定すること（１）
- ・ 生徒が固定化してしまうこと（１）

(8) 効果的な開始学年

少人数指導を開始する際に効果的な学年を示したのが，次の[グラフ13][グラフ14]である。

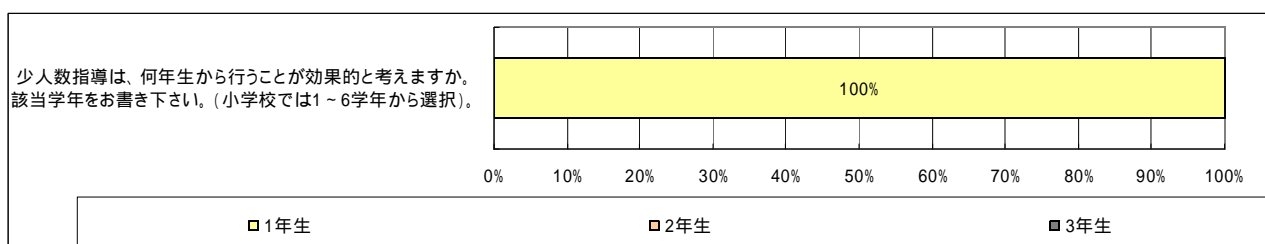
[グラフ13] 開始学年（小学校）

N = 30人



[グラフ14] 開始学年（中学校）

N = 30人



上の[グラフ13][グラフ14]のとおり，「少人数指導は，何年生から行うことが効果的か」という質問の回答割合は，小学校では，早期の指導が大切であることから第1学年が60%で最も多く，低学年で学級を落ち着かせた上で第3学年（30%）から行うという考えが続いている。また，中学校では，すべての校長が1年生からの実施が効果的であると回答している。

【主な理由】

小学校

（1年生）

- ・ 生活習慣が十分に身に付いていない子どもが増加しているから。
 - ・ 低学年のうちに，きちんと基礎的な学習内容や学習の仕方を身に付けさせることが大事だから。
 - ・ 学習以前の生活面の安定が学習に効果的と思うから。
 - ・ 個人差が大きくどの子にも対応するためには，1年生から少人数指導が必要と考えるから。
- （1学級15人以上の場合）

- ・ 個に応じた指導は低学年から意識して行うべきで、そのためには少人数指導の早い段階での導入が必要である。ただし、指導体制は発達段階に応じた配慮が必要で習熟度別指導などは、中学年以上で実施すべきだから。
- ・ どの学年でもきめ細かな指導を行うことで、指導の効果が期待できるため。
- ・ 小1プロブレムの問題からも1年生から少人数指導を取り入れたいから。
- ・ 数の大小、系列については一斉指導でもよいと思うが、計算に入ると個人差がでてくるので、その差を埋めるために少人数指導が必要であるから。
- ・ 指導者の指導力向上のため

(2年生)

- ・ 1年生にすこやかサポートが配置される中、2年生でも個に応じた指導を継続すべきである。

(3年生)

- ・ 低学年は、人間関係が安定した中で、担任が主となって指導をした方が効果的に思う。学習でのしつけや学習習慣を身に付ける上でも大切な時期である。個人差があらわれる中学年から少人数指導、さらに習熟度別指導を進めていけばよいと思うから。
- ・ 低学年のうち、教室を分けて少人数指導を実施することより、(サポートを配置し)同じ教室でTT等を実施するほうが効果的であるから。
- ・ 低学年児童は、自分が学習するコースや学習場所を理解するまでに時間がかかったり、間違えたりすることが多い。そのため、本校では、中学年以上で少人数指導を行うことにしている。
- ・ 児童の心身の発達特性や児童の学習する内容等から
- ・ 3年生からは、授業時数が増え、課外の余裕がなくなってくる上に、学習内容も難しくなってくるので、1単位時間の学習時間を効果的に使うことが求められるため。
- ・ 3年生から学習内容の定着率がさがる傾向が見られるから
- ・ 低学年は、学習習慣・生活習慣の確立の意味で少人数学級の実現が最優先であり、学級担任とのコミュニケーションが最も重要であると考え。又、サポート教員等の加配の方が適当であると思われるから。

(4年生)

- ・ 学習内容がいきなり難しくなり、子どもたちの習熟度に大きな差が見られてくるから

中学校...すべて1年生からの導入を希望

- ・ 1年生段階でも差が大きいから。
- ・ 英語の初期指導に効果的だから。
- ・ 数学の「正負の数」等、1年生の内容はその後の土台になる重要な内容であるから。
- ・ 中1ギャップを未然に防止するためには、中学校1年生からきめ細かな指導が有効だから。
- ・ 中学校3年間はあっという間であるから。
- ・ 学習習慣をつけやすく、その後の指導深化も図りやすいから。
- ・ 学習面や生活面で基本を徹底して指導できるから。
- ・ 小学校からの流れを大切にするため。
- ・ 英語・数学の苦手意識を持たせないようにするため
- ・ 小学校で差がついてきている部分を補うため。
- ・ 部活動のある中学校では、放課後に個別指導を行うことが難しい。1年生で基礎基本の定着を図らないと卒業時まで回復することが難しい実態である。

調査結果のまとめ

1 少人数指導の効果と考えられること

校長への調査結果から効果として考えられることは、次のとおりである。

- (1) 学力の向上や学習意欲の高まり，発言・発表の増加等の学習面で効果があがっている学校が多く見られること
 - (2) 基本的な生活習慣の定着，不登校やいじめ対策にも効果をあげている学校が見られること
 - (3) 教師の授業に取り組む意識の高揚等が図られ，学校経営が活性化されていると回答している学校が多く見られること
 - (4) 児童生徒の人間関係を把握しやすく，トラブルを未然に防ぐことができるようになった学校が多いこと
 - (5) 少人数指導について保護者が好意的に受け止めていると捉えている学校が多いこと
 - (6) 学級・教科担任が学習面や生活面を指導する上での負担軽減につながっていること
- なお，すべての校長が「少人数指導をこれからも継続したほうがよい」と回答している。

2 少人数指導の課題と考えられること

- (1) 少人数指導の開始時期を検討すること
- (2) 打ち合わせ時間を確保すること
- (3) 少人数指導加配を生かしたよりきめ細かな指導の在り方を検討すること
- (4) 保護者の理解をさらに広げていくこと
- (5) 少人数指導の研修の充実